

意味としての行動

—ジョージ・ハーバード・ミードの学説と生涯—

三 隅 二 不 二 *

Action as a meaning: The work and life of G.H. Mead

Jyuji MISUMI

1. 意味としての行動

人間は二つの意味の世界に住む、その一つは物の世界であり、もう一つは心の世界、即ち社会的世界である。ミードによれば、人が物を見たり、音を聞いたりすることは、その物理的対象に到達し、手で操作し、工作することを意味する。言葉をかえていえば、物の世界は、人が見る、聞くことを出発点、あるいは手段として、対象に到達し、工作することを終点、あるいは目的とする行動のプロセスである。もう一つの心の世界、即ち、社会的世界は、物の世界の終点を出発点とし（あるいは、手段とし）、他者とくに組織された他者の役割をとることを終点あるいは目的とする行動のプロセスであると定義する。

ミードの意味論には、従って大きく二つの視点が含まれ、その二つが相互浸透しているのである。

ミードの *The Physical Thing* (*The Philosophy of the Present* 1932, pp.119-139) の論文は、ミード哲学の全体を理解する鍵となる論文であるとミラー (D. Miller) は述べている。

この物理的対象に関するミードの理論は、ミードの時間論とともに、ミードの理論が現象学や論理実証主義を越えたものであることを理解することに有力な手掛かりを与えるからである。また、現代心理学における知覚の行動的意味の考察に対しても示唆を与えるものといえよう。

次にミードの知覚論について筆者が行った知覚実験を略述しながら考察をすすめてみよう。

2. 知覚論とその検証

「知覚には現象性と記号性との二面性がある。或は対象と意味という語で区別することもできるであろう。記号性に関しては経験的效果は重要な役割をもっている。しかし、現象性あるいは対象性に経験がいかに参与するかについては、心理学史上面倒な議論があったことを考えねばならない。17世紀以降の先天説、経験説の哲学的論争は考えないとしても、19世紀後半の生理心理学においても、外物の知覚、特に視空間及び觸空間の成立及びその特性について、ボーリング (D.G. Boring 1942) が大きなしかも大部分実りなき論争と評した先天説と経験説との対峙が続いたことは人の知る通りである。」 (園原太郎、1953)

ミードの知覚論は、知覚心理学の理論としてのみ展開したものではなく、哲学的認識論を含むものであり、知覚論と知識論をふまえたものである。しかし、ミードの論述は、社会的行動主義といわれるだけに形而上学的論議に終始したものではなく、事実と相即した側面が貫通しているのである。知覚現象の先天説か、経験説かの論議のいづれにミードの知覚論は傾いているかといわれるならば、それは後者であろう。しかし、知覚的現象に内在する生得的条件を否定するものではない。

さて現代心理学の理論的基礎づけの役割をしたゲシュタルト理論においては、知覚現象をなりたたしめる知覚体制の自発的、内在的法則性を主唱してきたことは周知のことである。その知覚体制のもつゲシュタルト法則は、経験的反覆よりも決定的に優位であることを実証してきたのである。

例えば、知覚における恒常現象に関する諸研究は、空間知覚において経験効果を否定してきた。九州大学の秋重義治は一人の9才になる先天性瞳孔閉塞症患者及び4才のとき失明した11才になる同患者のアトロピンによる開眼処女経験において、前者では正常者の60%、後者では93%の形の恒常性を認めている。秋重はこれらの事実を以て、知覚的恒常学説を展開し、経験効果を否定し、恒常性は、先験的に、知覚が働くときの自動的な体制であると主張している。三隅二不二も、生後6カ月の乳幼児に、大小二つの仁丹程の小さい赤い球を用いて、大きさの恒常性の存否を検証する実験を行っている。

這い這いの乳幼児の眼前に大小の二つの球をおけば、乳幼児は大きい球を選択する。そこでその大きい球を、網膜像が、小さい球と同じか、少し小さくなる距離においたところ、乳幼児は網膜像が同じか、または小さいにも拘らず大きい球を即座に選んだのである。従って、生後6カ月後で、既に大きさの恒常性が乳幼児の極く身近な空間において生じたことが見出されたのである。この事実もまた知覚的恒常性の年令的発達性を否定する知見である。しかし、これに対して、H.P. ZeiglerとH. Leibowitzは、子供と大人を比較した実験を試み、大きさの恒常性が、比較対象の距離が遠ざかるにつれて、7~9才の学童の方が大人より低くなることを見出している。勿論、乳幼児に対して、彼等が用いた実験条件で実験を行うことはできない。たしかに、乳幼児の極く身近な空間においては、知覚体制がかなり分節化しているので、恒常性を見出すことができるが、しかし、もし上述の実験のように遠距離（最大100フィート）において乳幼児の恒常性を測定したとしたならば、成人より明らかに低いものであろう。いづれにしても、ゲシュタルト論における経験効果の排撃は、知覚体制が確立していることを前提としたものであって、知覚体制それ自体が、どのような発生機序で形成され学習されるのか、あるいは生得的なものかについては充分解明されているわけではない。多くの実験研究の結果は、知覚的恒常性は、網膜像の変化に対して比較的恒常的傾向があるという程度であって、比較対象呈示の距離などによって恒常度はたえず変化するものである。とすれば、知覚的恒常性をささえる知覚体制も生得的に固定したものというより、状況の変化に依存したものといえよう。従って、むしろ、知覚体制が、経験によって、いかに再体制化されていくかが問われるのである。

秋重の先天盲の実験においても、詳細に検討すれば、被験者が対象比較を行うとき、身体運動を阻止して固定すれば、恒常性が著しく減少することが報告されているのである。原初的知覚体制の形成に身体的運動という経験的因子の介在が示唆されていたのである。

三隅二不二（筆者）は、この点に着目して、知覚的恒常性がよってたつ知覚体制そのものの発生機序を探究しようとした実験的研究を試みた。そのためには、知覚体制が形成されていない原初的知覚状況を構築しなければならない。そして実験仮説としては、ミードの知覚の行動

的意味論を基礎としたのである。

生まれたての乳幼児には、まだ物理的対象のもつ性質は何もわかっていないだろう。外的対象の動きを目で追うことはできても、それだけでは、物の性質はわからない筈だ。やがて乳幼児は、目に入ったものは何でも接近して、把握しようとする。ローソクの火でも、豆腐でも、コップでも無差別に手でふれようとする。しかし、手で操作するプロセスで経験した物理的対象の“抵抗性”、すなわち、固さ、やわらかさ等が、対象性のもつ内的性質として変換するのである。そこに、“もの”としての“性質”を具備した物理的対象が発生するのであろう。

“もの”はかくして、生活体（オーガニズム）と環境との相互作用の行動過程のなかに発生するのであろう。とすれば手が自由に駆使できない四足の動物には、このような“もの”は存在しないのである。従って、“もの”の発生をもたらす個体の行動の位相として、少なくとも三つの位相が区別されよう。その第Ⅰの位相は、見る、聞くのみの位相であり、第Ⅱの位相は、対象に接近してそれを操作し工作する位相（manipulatory phase）であり第Ⅲの位相は行動完了の位相（consummatory phase）である。犬や猫のような四足動物には、この第Ⅱ位相の対象を操作し、工作することが欠落しているので、第Ⅰ位相から直接に第Ⅲ位相に移行することになる。この点についてはさらに後述することとして、知覚的恒常性の問題に移ることにしよう。

大きさ、形、明るさの恒常性をミードの知覚論の立場でのべてみよう。大きさの恒常現象とは、前述にふれたように、物理的対象が網膜に映じた大きさは、その対象が個体から距離的に遠ざかるに従って小さくなるにも拘らず、対象の本来の大きさが変わらないで見えることをいうのである。実際は若干小さく見えるようになるのだが、網膜像の変化ほど小さくならないでむしろ、本来の大きさに近く見えるという現象をさすのである。換言すれば、知覚的恒常性とは、遠刺激としての対象の知覚が、ミードのいう第Ⅱ位相、即ちmanipulatory phaseにおける対象の知覚と同一性を保持しようとする傾向であると述べることができよう。知覚的恒常性は、このような個体と環境との相互作用の行動過程を介して形成されるものであり、この過程を介して、いわゆる知覚体制が形成されるとするならば、経験を介しているといわねばならない。しかし、単なる経験説ではない。

おそらく、乳幼児が手を用いる過程を介して、知覚体制が形成されていくとすれば、その形成期は、乳幼児のかなり早い時期からはじまるのであろう。

既に6カ月で、乳幼児の身近な空間では大きさの恒常性が見出されたのであるから、それよりも早い時期に乳幼児の知覚体制は確立しているのかも知れない。しかし、その初期には知覚体制の範囲は狭く、その分節化の程度は確固としたものでないかも知れないが、手足の動作体制が確固としたものになる頃には、知覚体制の分節化も進化するであろう。このようにして、一度知覚体制が成立したあとでは、その体制内での経験効果が、知覚体制そのものに決定的な影響を与えることはないだろう。むしろ、知覚の記号性に拘る経験効果として意味づけられよう。

以上述べたことは、仮説である。この仮説を検証するためには、乳幼児の知覚的世界と類似の場を構築しなければならないのである。

次に筆者の実験について簡単に述べてみよう。

人間にとって、全くの未経験の世界を人工的につくることは困難であるが、近似的なものとして、完全暗室を用い、極めて細い光線で刺激をつくり、その光線の大きさをコントロールして標準刺激と比較刺激を設定して、大きさの恒常現象に関する実験を行った。勿論、その実験室に対して全く未経験の被験者をその暗室に誘導し、頭部を固定して、眼の前に二本の細い光

線を遠距離と近距離において比較するならば、恒常性零をつくり出すことができることをたしかめた。一本の光線は、いうまでもなく、一方は近距離、他方は2倍の遠距離において両者の光線の長さ(大きさ)を比較するのである。被験者の体験としては遠近の距離感がなく、全体の視野がなんとなく不安定だが、二本の光線が同じ距離に上下に並んでみえる。このような状況のときが、恒常性零の状況である。そのあとで、被験者が経験した刺激布置を消去するために刺戟の位置を移動してしまう。そして被験者を暗室のなかで自由に行動させたのである。そのあとで、再び、被験者に以前と同一の位置に刺激布置を設定して2本の線の比較を試みた。結果は、大きさの恒常性の増大を見出したのである。

因みに、暗室のなかで被験者を自由に行動させる前に、実験者の教示によって、二本の光線の位置を説明して、実験試行を行ったが、恒常性の上昇効果はなかった。

久米京子も、暗室での実験で、観察距離が0.5米から6.5米と距離が遠くなるにつれて普通の被験者の場合、見えの大きさは直線的に減少したが、同じ条件下で、実験装置を作製し、比較対象の刺激操作を経験した実験者二人を被験者にしたところ、高い恒常性を全部の観察距離でえられている。これなども、三隅の実験と同様に知覚体制の分節化に対する経験効果として解釈できよう。

大人の知覚体制はよく体制化しているので、“manipulatory phase”は視覚対象そのものに代表されているものとして解釈できよう。とすればこれらの知覚的恒常性における経験効果を見出した実験はミードの知覚論の一つの検証であるといえるのではないだろうか。

スペースシャトルで宇宙空間に浮遊する場合など完全暗室と同様、あるいはそれ以上に未知の世界であろう。そのような状況では、錯覚や幻覚が生じ易いのではないだろうか。宇宙空間は、人類の未来空間であるならば、知覚の行動的意味に関する研究はこれからの重要な研究課題であろう。

3. “もの”の発生機序

“もの”、物質、物体は、われわれにとって自明のこととして日常の世界に存在しているが、「猫に小判」の諺があるように、猫にとっては、われわれが考えるような“もの”、物質、物体なのであろうか。生れてまもない乳幼児のことについては前述したが、生れたばかりの新生児には、大人が認知するような“もの”の存在はないだろう。ミードによれば、物体運動のニュートンの三法則の基礎となっている物体の性質、即ち質量、慣性、作用-反作用の性質なども人間と環境との相互作用のなかで生じたものであるというのである。

系統発生的にみて、四足の動物の外的知覚と、人間との相違点は何であろうか、相違があるとすれば、それはいかなる条件発生的機序にもとずいて生じたのであろうか。ミードによれば、人からはなれて存在する物理的対象の“もの”としての性質は、人間と物理的対象を含む状況との相互作用のなかから出現する。その相互作用を人間個体の側から考慮すれば、知覚を出发点として、2本足でその対象に接近し、手でその対象に接触し、行作する行動過程(manipulatory phase)が介在して完結(cosummatory phase)に到る行動であることは前述した。

この行動のうち、中間に介在する行作の過程が、“もの”の発生機序にかかわることをミードは指摘するのである。乳幼児は手あたり次第、眼についたものを手で行作しようとする。その手で対象を把握したとき、手に対象からの圧迫を感受するが、その圧迫(Pressure)は対象への労作(effort)にもとずいたものである。この対象への圧迫と対象からうける抵抗(resistance)は作用と反作用の関係であり、両者は同一である。この経験を通じて物理的対

象には、手の行作にもとづく圧迫と同じ内的性質としての抵抗が発生するのである。“もの”として身体も、これと同じ発生機序によって出現するが、ミードによれば、乳幼児の“もの”としての身体は、周囲の“もの”の出現よりもおくらせて発生すると述べている。“もの”としての身体も、やはり、手の行作を介して、遠刺激としての物理的対象と同様の過程によってあらわれるのである。さて、ある固い対象を把握しようとするれば、先づ、人は自分自身のなかに、その固い対象を把握しようとする態度あるいは構えを準備するであろう。そしてその態度は、対象を直接に把握するまで継続するのである。もし、その対象が豆腐であれば、それに接近する最初の態度ないし心構えは、固い対象の場合と異なることはいうまでもない。即ち、遠刺激対象への最初の段階で、人は遠刺激対象のもつ内的性質の役割をとりながら対象に近づきそれを把握するのである。初期と中間と完結まで、そこには連続性があり、それは連続した一つの空間である。

四足の動物には、中間過程の行作 (manipulatory) の位相が欠けているので、物理的対象のもつ“もの”即ち、物質性が存在しないことになる。犬は餌物を見つけると直ちに接近してそれをむさぼる。行作の介入がなく、知覚から直ちに完了行動に至る。ミード (PA, p.143) によれば、四足動物は、時間と空間の分離がなく、時空的なミンコフスキー (Minkowski) の行動の世界に生きているのであると述べている。四足の動物は遠くにはなれた距離にある遠刺激としての物理的対象を現在の時点に持ち込むことができないのである。四足動物にとっても、刺激とそれに対する反応はあるけれども、その関係のなかに空間と時間のシステムが全くないのである。すなわち、遠距離の“そこ”の空間と現在との関係もなければ、“ここ”の空間と現在との関係もないのである。

人間にとっては、人間個体が遠距離対象に“抵抗”の態度をとっている限り、その対象は、“いま”という時間的位相のなかにある。その状況では、その対象は空間的な距離はあるけれども、時間的距離はないのである。知覚の世界では、存在しているものが何であれ、“いま”現在の時間的位相にあり、それは凡て物質という抵抗性をもっているのである。そこには、時間と空間の分離が要請される。また“いま”の確立が要請されている。そのことが、“いま”に直面する“そこ” (there) が存在するのである。“そこ”に存在する世界は知覚空間体制であって、それは断続的に消失したりすることのない一貫した連続体としての空間であり、そこに事物が存在しているのである。事物がわれわれに意味をもつというのはこの関係である。

個体は現存の“いま”のなかに、遠位刺激対象の役割をとることにより、その行作領域を展開するのである。このように遠位対象は、個体の行動との関連において、遠位対象であり、遠位対象に志向した個体の行動、とくに行作位相行動なしに、物質性は語れないのである。人間の外部に存在する物質の本質もミードは個体の行動のタームで説明するのである。

乳幼児は、対象物を見つけると、そこまで這っていき、その物を口に入れようとすることは、よく見かける行動である。乳幼児は最初は無差別にそのような行動をとる。そのうちに食べられるものと、そうでないものの区別がついてくる。それは一種の試行錯誤の過程であろう。知覚発達の初期にはこのような試行錯誤の過程があるが、それを介して、知覚体制ができ上がっていく。そのような知覚体制の形成には、外界の事物の凡てに接触する必要はない。事物そのもの、また事物の位置づけはいくつかの経験とその結果の汎化によって知覚空間として体制化、システム化されるからである。一度体制化されればその後の体制内の接近・行作の経験は知覚体制そのものに影響することはなくその経験は行作する世界の展開や社会的行動に志向したものになる。さて、知覚空間が体制化されても、やはり、遠位置の対象物に対しては、知覚それ自体は仮説的なものであり、その仮説を検証するものは、そこまで接近し、行作する行動であ

る。乳幼児以来の経験の蓄積のために、仮説が大きく外れることはまれにしか生起しないであろうが、やはり例えば視覚のみの位相と行作位相との間に結果にズレが生じる場合が常であり、またズレではなく、実際に工作不可能な場合がある。前者を錯視または錯覚と称し、後者を幻覚と称する。工作過程を手の延長として、厳密な測定尺度を用いれば、人間の知覚は錯覚のかたまりであることがわかる。知覚心理学の研究は、そのような錯視や錯覚がいかなる条件で生起するかについて組織的に研究をすすめてきたのである。このように考察してくれば、凡ての知覚的なものは、仮説的なものであり、遠位の物理的対象は、人間個体の行作過程を過去経験として含んでいるので、人間個体は、確信をもってその遠位対象に接近し、行作するのである。この意味で、ゲシュタルト知覚論で強調する知覚体制そのものも、動作的なものを含む経験の基盤を否定することはできないであろう。要するにゲシュタルト理論においては、知覚と行動の関係が、時間・空間論として把握されていないのである。

4. “こころ”の発生機序

“もの”とは何かについて上述してきた。ミードによれば、“もの”、物質の本質も人間の行動のタームによって説明されるものであり、それは意味としての世界であることを述べてきたが、心の世界も、人間個体にとって、もう一つの意味の世界である。

ミードによれば、心は社会的 (social) であるとのべている。心とは何かを考察するにあたって、先ずsocialとは何かについて考察してみよう。socialの境界には、non socialがある筈である。socialでない状況とはどんなものであるのだろうか。原初的行動とは、単なる衝動の表現であろう。その行動とは刺激と反応とその反応の結果から成立する一連の行動である。卵から孵化したばかりのヒヨコが地面の小麦の粒をついばむ行動には、何らの他の生物体の影響もない状態で生起するもので、本能といわれるが、しかしその行動にも選択性があることはよく知られた事実である。従ってヒヨコの餌をついばむ行動も、刺激に対する単なる受動的な反応ではなく、その刺激も生活体による選択的コントロールが働き、完結行動 (反応) に至るのである。そこには環境に対する選択的反応があるが、それは単体のみの場合においても生起するので、非社会的行動である。

犬が餌を見つけて食べる行動もまた非社会的行動である。食物を食べる行動であるから、犬には食物としての“もの”の知覚が存在するかと云えば、上述したように、そのような“もの”は存在しないだろう。犬はただ、餌物をかぎわけて食べるという、知覚から一足跳びに完結行動へ移る一連の行動が、時空的に存在するとかしいようがないのである。人間の場合においても、乳幼児はこの状況に近い。

乳幼児が、周囲の事物に接近して、手あたり次第にそれらを取り上げ、それを口にもっていく行動は、非社会的行動である。大人の場合、テーブルの上のコップをとって水を飲む行動は非社会的行動であるが、大人の場合は乳幼児ほど純粋の非社会的行動といえない場合が少なくない。柿の木にのぼって柿の実を取るという行動は、たしかにその行動の初発において柿をちぎろうとする行動が始発し、最終的に柿をちぎるのであるが、同時に、その柿を彼女に与えようとする行動も、implicitに始発時から重疊している場合があるのである。“もの”に志向した行動は非社会的行動であるが他者に志向した行動、即ち社会的行動が殆ど同時平行的に進んでいる。しかし、その社会的行動は、柿をちぎるという“もの”の行動が完結するまで、あくまで社会的行動としては始発状態のままであり、“もの”の完結行動の状況のときに実際に始発するものである。換言すれば他者の役割をとる社会的行動は、“もの”の完結行動を始発とし、あるいは手段としているのであり、それから柿を彼女に与えるという、他者への役割行動

の完結、即ち社会的行動としての終点ないし目的に至るのである。従って、“もの”の始発における社会的行動は“もの”の完結行動まで、そのままの状態のまま遅延反応 (delayed response) として止まっているのである。

さて、社会的行動は、系統発生的に考察するとき、人間以外の動物においても観察されるのであろうか。四足動物においても存在するのである。しかし、人間関係の場のような社会的状況ではない。従って原初的な社会状況と命名しておこう。さてもう一度犬の例に戻ってみよう。二匹の犬が、餌物を中心に争っている状況は、まさに原初的な社会状況である。第1の犬が、餌物を足で押えて唸っている声が、第2の犬に聞え、それが刺激となって第1の犬に歯をむき出して跳びかかり、犬の喧嘩となる状況を考察してみよう。このような原初的な社会状況におけるそれぞれの犬の行動を身振 (gesture) と称することができる。身振は生活体によって遂行される行動である。それは第2の生活体の反応を喚起する行動であるから、身振は記号 (sign) であり、刺激である。また、それはほかの生活体に対するサインであるという意味においては社会的である。社会的行動には必ず身振が含まれている。

さて、前述した原初的な社会状況にはコミュニケーションが存在する。

犬の闘争の場合、たしかにこの二匹は生き生きとした社会的相互作用の場を形成している。第1の犬が、まさに他の犬を攻撃しようとする姿勢が、第2の犬にとって刺激となり、そしてその第2の犬の反応が、第1の犬への刺激となって、第1の犬の構えや行動を変化させるのである。第1の個体の反応が、第2の個体のはじめの行動を変化させるのである。ここには身振のコミュニケーションが存在する。しかしこの身振のコミュニケーションには、この二匹にとって共有される、その意味で普遍的な意味を喚起しないのである。この犬の闘争の状況では、第2の犬の反応は第1の犬にとっての意味ではなく、第2の犬の反応もまた第1の犬にとっての意味ではないのである。意味は共有 (share) されないのであるからこれらは有意味の身振ではないのである。このような非有意義身振 (non significant gesture) もたしかに他者を含む行動であるから社会的行動であることは疑いえない。しかしながら、このような社会性の段階では、心は社会的なものといえども、まだ人間の心のようなものが発現しているとは云えない。

5. こころの発現と発達

人間の心は、前述のように他者を含む社会的相互作用の過程のなかで、他者、ことに組織された他者の役割をとる行動によって発現するものであるとミードは述べている。

乳幼児の初期は前述したように手足を動かして、やたらに眼につく事物をとり上げ、それを口にもっていく行動を繰り返す時期であるが、それが過ぎて二足で立上り、そのために自由になった手を用いて、とり上げた“もの”を、やたらに身近な人 (他者) に与えようとする行動があらわれる。これはまさに、他者の役割をとる行動の初期のあらわれであろう。この他者に手をさしのべて“もの”を与えようとする行動は、その“もの”を口にだけ運んだ行動と明らかに相異なるものである。“もの”を口に運ぶだけの行動は、非社会的な行動であるが、他者指向の行動は、まぎれもない社会的行動である。しかし、このような社会的行動の世界の展開を可能ならしめる、その基盤として、“もの”の世界の確立が前提となっていると思われる。“もの”の世界が、混沌としたゆらぎの世界では、社会的なもの、心的なものも成立できないであろう。社会的世界では、“もの”の世界を基盤としそれを手段として成立するといえるからである。

さて、他者の役割をとる行動は、やがて子供の“ごっこ”遊びにみられよう。郵便屋さんの

役割、お父さん、お母さんの役割をとる乳幼児の“ごっこ”遊びは、たしかに他者の役割をとる行動である。

“ごっこ”遊びのなかで、幼児は、他者の役割を自らとることによって、他者の反応をひき起こす個人の行動や身振が、同時に、その本人自身におなじ反応をよび起こすのである。犬の闘争の場合は、このようなことはおこらない。一匹の犬の態度が、他の犬におなじ状態をひきおこす傾向はない。従って、“ごっこ”遊びは、犬の闘争にみられるような社会的相互作用を超えたものではあるけれども、その“ごっこ”遊びは全体として組織化され、統合された社会的行動をなしていないのである。

このような“ごっこ”遊び (play) から、ゲーム (game) 遊びになれば、個体の反応様式に変化があらわれる。それは他者という単体の役割ではなく、組織された他者の役割をとることが要請されてくるのである。

例えば野球チームの場合、投手がベースに立って手を大きく振りはじめたとき、彼は9名の各個人の役割のシステムを自分の態度のなかにとり入れているのである。ミードは、組織された他者の役割をとるという代わりに、しばしば一般化された他者の役割をとると称する。

さて、他者の役割をとる段階から、一般化された他者の役割をとる段階への発達は、6才から7才になってからだD. ミラー (D. Miller) は述べている。このような一般化された他者の役割を自分自身のなかにとり込むことができない状態では、まだ自己同一性も定かでない時期といえよう。どのようにして自己 (self) が確立してくるのか。この点に関するミードの考えについては次項で述べる。

以上述べてきたように、ミードは、心の発生のルーツを、原初的社会的相互作用の状況における身振の概念に求めている。

第1の生活体の行為が、第2の生活体の反応に対する刺激となるという意味で、本質的に社会的であるが、動物の水準では身振は、他の生活体の遂行反応に対する刺激にすぎない。しかし、人間においては、期待される結果が身振をとまるときには、意味 (meaning) が生じ、自省的意味が生まれる。身振にルーツをもつ意味の意識こそ“心”の本質であるとミードは考えている。そして、意味の意識は、まさに反応しようとする対象物への個体の側の態度の意識としてなりたっているのである。

すべての身振は、それに反応する他の生物体の存在を前提しているのであるが、その社会行動としての身振のなかで、ミードは心の発達において有声身振を重視している。動物の段階においても有声身振は存在するが、とくに人間の場合は、それから言語が発達し構成されるのである。有声身振が人間においてとくに重要であるのは、それが他者に喚起する反応と同じ様式の反応を個体うちに喚起するからである。人間は自分の声が、他者にきこえ他者に反応をよび起すと同時に、その自分の声を自分の耳できくことによって、自分自身を他者の位置におくこと、すなわち自分のうちに他者の役割をとることを可能ならしめるのである。勿論、このことを可能ならしめる人間の脳メカニズムの発達が平行していなければならない。

このような有声身振が、他者と同様の反応を自分自身のなかにつくり出す関係を生じ、その反応が、その後におこる行動の刺激となるとき、有声身振は人間個体にとって有意義シンボルとなる。この関係をミードは、面白い事例を引いて説明している。ある精神喪失の大学教授の例であるが、その人が晩餐界のために洋服をぬいで着がえはじめたのであるが、気がついてみるとパジャマをきてベッドにいたという話である。洋服をぬぐという最初の行動の意味は晩餐会に出席することであったのだが、それが意識されないまま、着物をぬいで、習慣的にパジャマをきてしまったという話である。反応はその後の段階におこる行動への刺激となる。即ち着

物をぬぐうという反応は、その後の行動即ち晩餐会に出席するという行動への刺激となる筈のものでそうならなかったのである。その後におこる行動が、彼の最初の行動を起こす十分な刺激とならなかったのである。意味とは、一般的に、社会的相互作用の状況において、第1の個体の身振と、それに反応する第2の個体の反応と、及び、第1の個体の身振のあとに続くその身振の完結行動との三者関係のなかに成立する。

言語は、ミードにとって、心が発生する場であるが、心は言語と同じではない。というのは、ミードは心像 (imagery) のような主観的内容の存在も心のなかに含めているからである。心は特定の個体と環境の間に行われる行動の場に存在する。そして、そこで個体は、一般化された態度をとることを通して、自己を含めてすべての人々に有意味であるシンボリック身振を用いるのである。

6. 自我の発生機序

ミードによれば、自我も社会的行動から発生することを強調する。すべての社会的行動はコミュニケーションを含む、コミュニケーションは社会的行動においてのみ存在するのである。そこでミードの仕事は、コミュニケーションの社会的過程から、いかにして自我が生まれるかを示すことである。

個体は自分自身の身振に対して他者または一般化された他者の態度をとることによって、自分自身の身振に暗黙 (implicit) に反応するのであるが、そのようにして個体は自己を意識するのである。これを簡潔に述べるならば、個体が自分自身にとって社会的対象であるとき自我といえよう。社会的対象であるということは、個体が自分自身の身振の意味を認知しているということの意味している。

自我は、身体のような実体的なものではない。自我は社会的経験のなかで発達していくものである。

ミードは、上述したように社会的過程としての心を考察しているが、また個としての自我も社会的過程の産物として認めているのである。自我は自省作用 (reflexiveness)、即ち、主体 (subject) が、同時にまた客体 (object) であるとする能力に依存している。

いかにして、生活体が、自我がよって立つその自省作用を獲得するかを説明することは、心理学の重要課題であろう。

自我発達の基礎をなすこの自省意識 (reflexive consciousness) の原初的メカニズムは有声身振である。自分自身の有声身振を自ら認知できることによって、個体は、自分自身を、自分自身に対して客体とするのである。

有意味シンボルとしての有声身振を使用することによって、個体は自分自身に対して他者の態度を自分のうちに喚起することによって、個体は主体であると同時に客体になるのである。

さてミードは、自我発達に関連するものとして、幼児のごっこ遊びとゲームについて述べている。これについては心の発達の項で述べたが、自我の発達として考察するとき、少なくとも三つの発達段階が区別されるといわれる。自我発達の第1期は、自他未分の段階である。幼児は自分の人形のことを「これは啓子ちゃんの人形だ」といって、母親がその子に語りかける言葉をそのまま用いて表現する時期である。その時期では「私の人形」とはいわないのである。2才半頃になって「これは私の人形」といって姉と喧嘩するようになる。これが自我発達の第2期である。そして思春期に達すると充分なる自我の発達段階である第3期に達するのである。

前述したように学童たちがゲームにおいて、一般化された他者の役割をとりはじめるのは、思春期以前にはじまるようであるが、自我の統合性ができることによって、自我が確立するの

は、この一般化された他者の役割が充分とれるようになってからである。

自我は個体 (individual) である。この個性は、パラドクシカルであるが社会性に意味づけられているのである。個体としての自我は他者との関係においてのみ個体であるといわねばならない。繰り返してのべるが、自我の本質は自省性 (reflexiveness) にある。即ち他者の観点から自分自身を客体としてみる能力である。そしてこの自省作用は内在化した会話 (思考) とかみあっているが故に、自我は、基本的に認知的 (cognitive) なものである。

さて、ミードの自我論の展開として、彼は自我の2つの側面として“*I*” (主体的自我) と“*me*” (客体的自我) を区別している。“*I*” は自我意識としてははっきりとはあらわれないのである。意識として明らかにあらわれるのは客体としての“*me*” である。しかしながら、“*me*” は“*I*” なしには考えられないのである。主体である“*I*” があっての客体“*me*” が存在するからである。日常生活において、われわれは手紙をかいたり、論文をかいたりする。もっとも最近では、かく代りにワープロを打つ場合が多いだろう。いづれの場合でも、あらかじめ手紙や論文の文章の一言一句が明確に意識のなかに存在していて、それをかいたり、ワープロに打出すわけではない。勿論、手紙の最初のかき出しは、季節のあいさつ等、常套的、習慣的に繰り返す文章があるだろう。しかしその場合でもいくつかの選択可能性があるもので、どれをえらぶかは必ずしも意識のなかに明確でない場合が少なくない。ところで、手紙や論文の文章は、かきながら、ワープロを打出しながら出来上がっていく。われわれは、考えながら、即ち、自分自身に話しかけながらかいていくが、自分がかいたもの、即ちそれは“*me*” であるが、それに反応する“*I*” の存在には、気づかないのである。それは恰も、自分自身に話しかけはするが、それを行っている自分自身を見ていないようなものである。たしかに、かいたものに反応する何物かが存在するから、その出来上りに自分ながら驚くことが少なくないのである。それは自分にとってよいものであれ悪いものであれ、自分があらかじめ明確に意図し、意識したものを越えるあるものの仕業をあとで知るのである。

それを知ったときは、それは“*me*” である。“*me*” に絶えず働きかける“*I*” の存在の故に、そこに独得の文章ができ上がっていくのである。

“*I*” は、文章をかく行為の過程のなかで、偶発するものであり、かいたあとで修正を要するような逸脱や偏りを産出するものであったり独創的なものの創出、即ち、創発であったりする。行為を含む全体状況のなかで一般化された他者の役割をとる行為は“*me*” であるが、それに対して反応するものが“*I*” である。自我は本質的に、こういう二つの側面をとらないながら進行していく社会過程である。“*I*” の存在は、たしかに殆ど意義され難いものであり、そのはたらき自体も不確定のもの、ダイナミックなものであるが、それ自体形態がみえないものだから、ミードの*I*の定義があいまいだという批判がある。しかし、対象それ自体があいまいなものであることと、定義があいまいであることは別問題であろう。明確に、“*me*” だけでは、生活体としての人間が、環境との相互過程のなかで適応していく過程が説明できないのである。

7. 結 び

G. H. ミードの諸説について述べてきたが、本論はミード論のほんの一部に過ぎないことを読者におことわりしておかねばならない。その主たる理由は紙数の制限である。ミードは哲学者であり、社会学者であり、心理学者である。従って、これらの分野で関心がもたれてきた。しかし彼はこれらの学問分野を網羅的に体系づけようとしたわけではない。むしろ、彼が懐いたテーマが、これらの諸分野にまたがる今日でいう学際的なテーマであったためである。従っ

てミードの理解のためには、彼の中心テーマが何であったかをはっきりと把握していくことが重要だと思われる。

わが国では心理学会より社会学会で論議がなされ、日本心理学会では殆ど問題視されていないように思える。筆者自身心理学出身であることもあって、本論は主として心理学的側面についてのミード論を述べたつもりである。

8. ジョージ・ハーバート・ミードの生い立ちと学者としての生涯

ジョージ・ハーバート・ミード (George Herbert Mead) は、1863年2月27日にマサチューセッツ州のサウス・ハードレイで生まれ、1931年4月26日に、イリノイ州のシカゴで大手術の予後の心臓麻痺で急逝している。

父方は、農家出身であるが、彼の父は牧師であった。母方は、アメリカで著名な家柄筋の出であった。ミードが18才のとき彼の父は他界した。それから彼の母はカレッジで教えたが、あとで学長となっている。教養と気品にあふれた婦人だったようである。ミードは16才のとき、オベリン・カレッジに入り、20才で卒業している (1879-1883)。その4年間の学生生活のなかで、親友となったヘンリー・カッスル (Henry Castle) と出会っている。この時期にミードとヘンリー・カッスルにとって重要な一つの出来事が起ったといわれる。それは彼等が教会のドグマを論破することに成功したことであったという。

オベリン・カレッジを卒業したあと、三年間は西北地方のフロンティアに住んでいる。そこで測量技師となってヴィスコンシン中央線の測量に従事している。その後、親友カッスルのすすめもあって、ともにハーバード大学に一年間滞在している。(1887-1888)。その時、ミードはウィリアム・セームス (William James) の家に住んでセームスの子供の家庭教師をしたりしたが、ミードはむしろジョサイア・ロイス (Josiah Royce) の講義に影響を受けたようである。そこでヘーゲル (Hegel) の絶対主義観念論について学習している。しかし何故か1ケ年のハーバード滞在ののち、ミードは、カッスル兄妹と連れだってライプツヒヒとベルリンに行った。(1881-1891)。ミードはライプツヒヒにおいてW. ヴント (W. Wundt) の実験心理学の実験室で生理心理学を学び、またW. ディルタイ (Wilhelm Dilthey) の指導を受けている。ミードは、このディルタイの下で学位論文の準備にとりかかったが、それを完了せずに帰国している。ミードはのちに、ユニークな社会行動としての身振論を展開するが、ヴントの身振論の影響を受けたことが推測される。また、個人の思考は、歴史的、社会的、そして文化的背景を知ることによってのみ了解されるというディルタイの発想は、ミードの自我に関する社会理論に影響したにちがいない。けれども、ミードはこれらの影響に拘ることなく、その後、それを超克して独自の見解を展開している。

さて、ミードは滞独3年目にヘンリー・カッスルの妹ヘレンと結婚している。そして、1891年に、ミシガン大学の哲学部で教鞭をとるように招かれ、前述したようにベルリンでの学位取得を中断して帰国、ミシガン大学の講師となった。29才のときである。

ミシガン大学で、ミードは哲学と心理学を教授したのであるが、ここでJ. デュイ (John Dewey) と、C. H. クーリー (Charles H. Cooley) 等と出会うのである。ミードの葬式演説集によれば、この時彼は、「その後40余年間頑として離さなかった彼独特のライフワークをスタートとしたという。そのテーマというのは、個と全との関係を、当時、生物学的に見直された心理学その他の諸科学の立場から客観的に考え直すことによって、心ないし意識の客観的再定義を企てることであった。」(三隅一成、1975、P175) ミシガン大学での3年間は、ミードにとって、現在、シンボリック相互作用論といわれている社会心理学の基盤形成の時期であっ

たともいえよう (Schellenberg J.A., 1978)。1894年、ミードは、デューイのすすめに応じて哲学部の助教授としてシカゴ大学にやってきた。彼はベルリンで学位を取らなかったけれども、彼の昇進は早かったといえる。1902年には彼は准教授 (associate professor) となり、1907年には正教授 (full professor) となっている。

ミードは、哲学者であり、社会学者であり、そして優れた心理学者であった。

15年間、研究生活と教育者としての生活と、また日常生活においてともに親交が深かったデューイは、前述したミードの葬式演説のなかで、「彼は過去数世代のアメリカ哲学界で最上級の独創的な思索家である」と述べ、N. ホワイトヘッド (Alfred North Whitehead) も「デューイ教授と全く同意見である」と述べている。そしてまた、葬式演説集の他の個所で、デューイは「ミードの行動主義的な社会心理学の考えは、私自身の思想に改革を与えたが、私自身は彼がいわんとすることをなかなか理解できなかったのである。ミードの根源的な思想がなかったならば、私自身の思索がどんなものになったかと思うだに嫌である。彼の思想は不断に本来的に独創的であった。」(三隅一成、1975、P174)

ミードの年長者で先輩であったデューイは、10年後シカゴ大学を去り、コロンビア大学に移ったが、ミードはシカゴ大学にとどまり、37年間1931年に68才で世を去るまでシカゴ大学で哲学の教授の地位にあった。

ミードがシカゴ大学にいた頃、内省主義心理学と対照的な、実験的乃至客観的心理学を主唱したジェームス・ローランド・エンゼル (James Rowland Angell) が、ミネソタ大学から助教授として移っていた。彼の実験は動物を対象としたものであったが、ジョン・B・ワットソン (John B. Watson) は彼の下で大学院生であり、エンゼルの下で動物実験の助手をしていたのである。ミードは、ワットソンが行っている動物実験に興味を持ち、しばしばワットソンと討議したようである。ワットソンは次のようにミードのことを述べている「私はミードが教えていた講義と演習をとった。私は教室でのミードの講義は充分理解できなかったけれども、ミードは長いこと私の動物実験に強い関心を示した。たいていの日曜日には、私とミードは実験用のネズミとサルを観察しながら実験室で過ごした。……これまで私はこのように親切で立派な人に会ったためしがない」(Watson, 1936, P.274. 早川・井上訳 P.41)

いうまでもなく、ワットソンは1914年に「行動主義—比較心理学入門」を刊行し、行動主義心理学の元祖のようにいわれている。しかし、1920年代に行動主義心理学は7人による7派があったといわれる。即ち、J. ワットソン、G. H. ミード、K. S. ラシュレ、E. C. トールマンのほかマックス・マイヤー、ワイス、ハンター等である。上述のミードの葬式演説集 (1931) の中で、J. デューイは、「行動主義心理学の創始者はミードであって、J. ワットソンではない」と明言している。そして「ミードの社会行動主義こそ最も健全なものであると断言する」(三隅一成、1979、P.27) と述べている。

ミードが、生活体行動の客観的研究としての行動主義心理学を発表したのは、1903年、シカゴ大学10周年記念論文集のなかでの「心性の定義 (“The Definition of the Psychical”)」である。そして、ワットソンが大学院生として入ってきたのは、ミードが「動物の知覚」に関して発表したとき、即ち1907年である。

ワットソンの行動主義は意識のない心理学を提唱して誤って行動主義心理学の元祖となり当時の心理学会を騒がしたが——もっとも後にこの主張は彼自身の手で多少修正されたが——ミードが行動主義心理学を創設したときの彼の興味の中心はむしろ意識であった。」(三隅一成、1975、P.198)

ゲンタルト心理学派の人々が、アメリカ心理学の代表として行動主義心理学を批判の対象と

したが、それはワットソン流のものであって、ミード流のものではなかった。

行動は刺激に始まって反応に終る。これはワットソンの行動の見方であり、S-Rパラダイムであるが、ミードによれば、反応の初発は刺激の終りに影響すると述べている。

入力 (input) が出力 (out put) として変換される過程において、出力側から入力に対するnegativeフィードバックが生じて入力をコントロールする関係を、ミードは既に今世紀の初頭において、刺激と反応の相互作用の過程において言及していたのである。このような刺激と反応間における相互作用ないし可逆性の強調は、いうまでもなく、ワットソン流の行動主義と区別されるポイントの一つである。

さて、シカゴ時代のミードは、動物心理学や神経学、生理学や物理学にも非常な関心をもっていたようであるが、哲学者としてのミードは、デューイやタフト (Tafts) やAngell等とともに行動哲学派 (pragmatism) と呼ばれていた。(因みにわが国では William Jamesのプラグマティズムを実用主義哲学と称してきた。)

さて、ミードの40有余年の学生生活における思索過程を、*三隅一成は次のように概観している。

(1) 1894 (31才) ——1902年迄……彼の思想体系の準備期

生物学 (ロイド・モルガン)、生理学、物理学 (ラスウィッツ) 等の研究時代、また社会改造に関し二論文

(2) 1903年 (40才) ——1909年迄……知覚的=行作的過程の再定義の時代

前期 1903~7年

「心性の定義」(1903)

「心像または感覚」(1904)

理論定義 「心理学と哲学との関係」(1904)

「ヴントの神話論と宗教論における想像」(1906)

「動物の知覚」(1907)

「模倣と動物知覚との関係」(1907)

後期 1906~9年

教育に関する9論文と社会問題に関する2論文による彼の理論のテスト

(3) 1910年 (47才) ——1919年迄

行作的=社会的過程並びに自我の再定義時代

前期 1910~13 理論提示——自我論

関係5論文

後期 1913~20 政治経済に関する2論文

……による彼の理論のテスト

(4) 1920年 (57才) ——1926年迄

個と全に関連する論文3

科学方法に関する論文1

美学に関する論文1

(5) 1927年 (64才) ——1931年迄

知識論に関する論文1

時間論に関する論文1

国家・国際関係論に関する論文1

なお、(1)より(4)迄は主として行動内容の研究に関するが、(5)は行動形式を論じたもの。

*三隅一成は、1927年、シカゴ大学の大学院時代にミードに師事し、1929年、ミードが加州大学でミルス基金講義の時、ミードについて加州大学の大学院及びスタンフォード大学院で学び、集中的にミードの講義・演習をとり、帰国後、行動科学化協会を昭和18年に東京で創設、ミードの思想に立脚したリサーチと普及を行った。1978年、米国のシンボリック相互学会から、Herbert Blumerと一緒に第1回ミード賞を得ている。

参考文献

- 秋重義治 1932 大きさの恒常現象に対する一貫賦——先天性隻眼者に施行せる実験報告—— 心理学研究, 7, 229-235.
- Akishige, Y. 1937 Experimentelle Untersuchungen über die Structur des Wahrnehmungsraumes. Einband und Druk in der Kaiserl. Kyushyu-Universität-Press.
- 久米京子 1952 みえの大きさと観察距離との関係並びに大きさの恒常を規定する要因について (II) 心理学研究, 23, 32-43.
- Leibowitz, H.W. 1965 Visual Perception. New York: The Macmillan Co.
- Mead, G.H. 1932 The Philosophy of the Present. Chicago: Open Court.
- Mead, G.H. 1934 Mind, Self, and Society: From the standpoint of a Social Behaviorist. Chicago: University of Chicago Press.
- Mead, G.H. 1936 Movements of thought in the Nineteenth Century. Chicago: University of Chicago Press.
- Mead, G.H. 1938 The Philosophy of the Act. Chicago: University of Chicago Press. (文中にPAと略述)
- Miller, D.L. 1973 George Herbert Mead, Self, Language, and the World. Texas: University of Texas Press.
- 三隅一成 1975 行動科学と心理学 産能短大出版部
- 三隅一成 1979 芸術とスポーツと行動科学 産能大出版部
- 三隅二不二 1949 大いさの恒常現象の発達心理学研究 心理学研究, 20, 16-24.
- 三隅二不二 1951 大いさの恒常現象を中心としてみた原初の知覚空間体制の発達心理学研究 北九州大学紀要第1集, 169-190
- Misumi, J. 1951 Experimental Studies on the Development of Visual Size Constancy in Early Infancy. Bulletin of Faculty of the Literature of Kyushu University, 91-116
- 園原太郎 1953 発生的見地よりみたる空間視知覚の問題—経験効果の考察— 哲学研究 第36巻第415号 京都大学。
- Schellenberg, J.A. Masters of Social Psychology. 1978. London, Oxford University Press. (社会心理学の巨匠たち。早川浩一・井上隆二訳)
- Zeigler, H.P. & Leibowitz, H.W. 1957 Apperent as a function of Distance for Children and Adults. American Journal of Psychology, 70, March.